

## 老年期アルコール症者の臨床的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉田, 知己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/891">http://hdl.handle.net/10271/891</a>

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博第 38号	学位授与年月日	昭和61年 3月26日
氏名	杉田知己		
論文題目	老年期アルコール症者の臨床的研究		

医学博士 杉田 知己  
論文題目

老年期アルコール症者の臨床的研究

論文の内容の要旨

研究目的

近年、飲酒者の増加により、アルコール症は年齢・性別・職種を問わず激増の傾向にある。厚生省の推計によるとアルコール症およびその予備群は150万人とも200万人ともいわれている。

従来、アルコール症は中年の男子に多いといわれていたが、平均寿命の延長を考慮すると、老年期のアルコール症はどのような割合で、どのような症状を示すかは関心事の一つである。しかし、これまでに老年期を厳密に規定し、数多くの症例を選択して、この問題にアプローチした報告は皆無であった。申請者は、対象の年齢を65歳以上と定めた上で、その条件を満たすアルコール症者について調査と分類を行なった。

研究対象と方法

研究対象として、昭和47年11月から昭和57年6月までに静岡県磐田市に所在する服部病院アルコール専門病床を退院した初診時年齢65歳以上のアルコール症者33名(男子31名、女子2名、平均年齢70.4歳)を選び、比較のため同時期に退院した初診時年齢40～49歳までの40歳代のアルコール症者357名(男子350名、女子7名、平均年齢43.5歳)をアルコール症対照群として、また静岡県西部に所在する有料老人施設入居中の65歳以上の非アルコール症者27名(すべて男子、平均年齢76.3歳)を老年期対照群として、各項目について検討を行なった。

研究方法は、同病院カルテを参考にし、不明確な点は、本人、家族との面接あるいは電話連絡により明らかにした。

結 果

老年期アルコール症者群において、アルコール症対照群と比較して、飲酒行動では明らかな差は認められなかった。また痴呆の割合は、老年期対照群と比べ、有意な差は認められなかった。既往歴は、老年期アルコール症者群では、アルコール症対照群と比較して疾患数が少なく、過去において身体的に健康であったことがわかった。同じ服部病院のアルコール症者625名の予後を調査した8年間の追跡によればアルコール症者の生命予後のうち年齢別死亡率は70歳以上を除くと50歳代が29.2%と最も高いと報告されていることから、若年に発症したアルコール症者のうち、重篤な身体的合併症を有する者の多くは、50歳代までに死亡し、老年期のアルコール症者は、若年時から身体的合併症を有しながらも比較的軽症であり、社会的障害も少なかったため、そのまま老年期に至った者、老年期になり飲酒量が増加し、問題飲酒化したため、それ以前には身体的疾患が少なく健康であった者などで占められていると推測された。

老年期アルコール症者の常飲年齢、問題飲酒開始年齢はさまざまである。常飲年齢は20～30歳前後が18名(55%)、40歳前後が11名(33%)と二つの群に、また問題飲酒開始年齢は、25歳前後が2名(6%)、40～50歳前後が15名(46%)、60歳以降が16名(48%)と三つの群に分けて検討してみた。そして、この常飲年齢と問題飲酒開始年齢に基づき、34歳以下を青年期、35～59歳を中年期、60歳以上を老年期とし、青年期→青年期をⅠ型、青年期→中年期をⅡ型、青年期→老年期をⅢ型、中年期→中年期をⅣ型、中年期→老年期をⅤ型の5型に分け、老年期アルコール症者の分類を行なった。

その結果、社会的状況はⅢ型、Ⅴ型(老年期に問題飲酒を開始した群)で比較的良好であったが、経済的状況はⅤ型を除き不良であり、身体的状況はⅢ型、Ⅳ型で比較的良好であった。アルコール依存予後は各型により差が認められ、特にⅢ型が最も良好であった。生命予後はⅡ型、Ⅳ型(中年期に問題飲酒を開始した群)が死亡率0%で最も良好であった。問題飲酒開始理由は、Ⅰ型では対人的ストレスが、Ⅱ型では社会習慣による飲酒がそのままアルコール乱用からアルコール依存へと発展したものが多かった。Ⅲ型では、社会習慣による飲酒から発展したものや家族、友人の死亡などの心理的要因などさまざまであった。

Ⅳ型では、中年期における仕事上あるいは対人関係上のストレスが多く、Ⅴ型では、退職あるいは配偶者の死亡、無聊など心理的要因が強かった。

### 論文審査の結果の要旨

近年のわが国における人口の老齢化およびアルコール飲料の消費状況などからみて、老年期におけるアルコール症の問題は今後次第に社会問題化していくことが考えられ、その社会精神医学的な実態把握が強く望まれているが、本分野はなお未開拓で、特に老年期を65歳以上と規定し、相当数の症例を対象とした研究報告は従来極めて少なく、わが国においては本論文が最初のものである。

申請者は最近10年間に某精神病院のアルコール専門病床を退院した老年期アルコール症者33例を研究対象とし、また40歳代を主体とするアルコール症者および老年期の非アルコール症者をそれぞれ対照として選び、これらの中で飲酒状況、社会経済的状況、アルコール関連の身体的および社会的障害、心理的特徴、アルコール依存予後および生命予後等に関連する多項目について比較検討を試みるとともに、今後の治療および予防対策の確立に資するため、常飲年齢および問題飲酒開始年齢に基づいた5型分類を試み、身体的および社会的障害や予後等のより詳細な把握を試みた。

審査委員会において、申請者によってなされた口頭発表と論文内容等について審議した結果、本論文として次の点が評価された。

1. 老年期アルコール症の臨床的および社会経済的特性には、アルコール対照群との間に基本的な差異は認められなかった。
2. 約半数が60歳以上で問題飲酒を開始しており、また過去に身体的合併症を有した者が少なく、あるいは有しても軽症で、アルコール関連社会障害も少ないことが分かった。
3. 5型分類では、症例数が少ないためあっても、各型の特徴をより明確に把握することは必ずしもできなかったが、問題飲酒が早く開始されるほど、社会障害および心筋障害の発生頻度が高いのに対し、肝障害の発生は常飲年齢が若いほど高率傾向となっていた。また、各型における問題飲酒開始理由の間に若干の差異が認められ、特に老年期において特有の心理的要因が主役となっていることが注目された。

すなわち、従来の報告では、老年期の問題飲酒者の多くは老年期に至る前に問題化するとされていたが、本研究により、老年期のアルコール症者は、若年時から身体的合併症を有しながら比較的軽症で、社会的障害も少なかったため、そのまま老年期に至った者のほか、常飲者が老年期になってはじめてアルコール精神病や身体的障害が表面化し、問題飲酒化したと認められた者や、老年期に入り種々の原因で問題飲酒を開始した者などからなっていることが明らかにされた。

なお審査会では次のような問題点が指摘され、討議が行われた。

1. この場合のように症例の収集が困難で、少なめな対象についてしか検討ができない場合の結論の導き方およびその普遍妥当性の評価について
2. 心理検査の応用方法について
3. 常飲年齢と問題飲酒開始年齢とを5型分類の基準に選んだ根拠および各型の特徴をより明確にするため、基準年齢について再検討する必要性について
4. 外国文献に認められるearly onsetとlate onsetによる2分類法との長短比較について

以上について、申請者は問題点の所在をよく理解し、概ね適切な回答をするとともに、残された問題についてさらに追求する旨の回答がなされた。

以上の審議の結果、本審査委員会は本論文は学位授与に値する十分な内容を備えているものと全員で判定し、審査を終了した。

論文審査担当者	主査	教授	浅野	稔			
	副査	教授	松下	寛	副査	教授	南方 陽
	副査	助教授	藍澤	鎮雄	副査	助教授	佐藤 愛子